

01
5807
01

精進新報

*Seiji
Shinda*

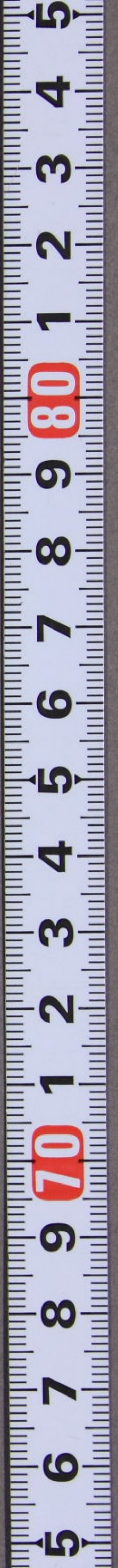
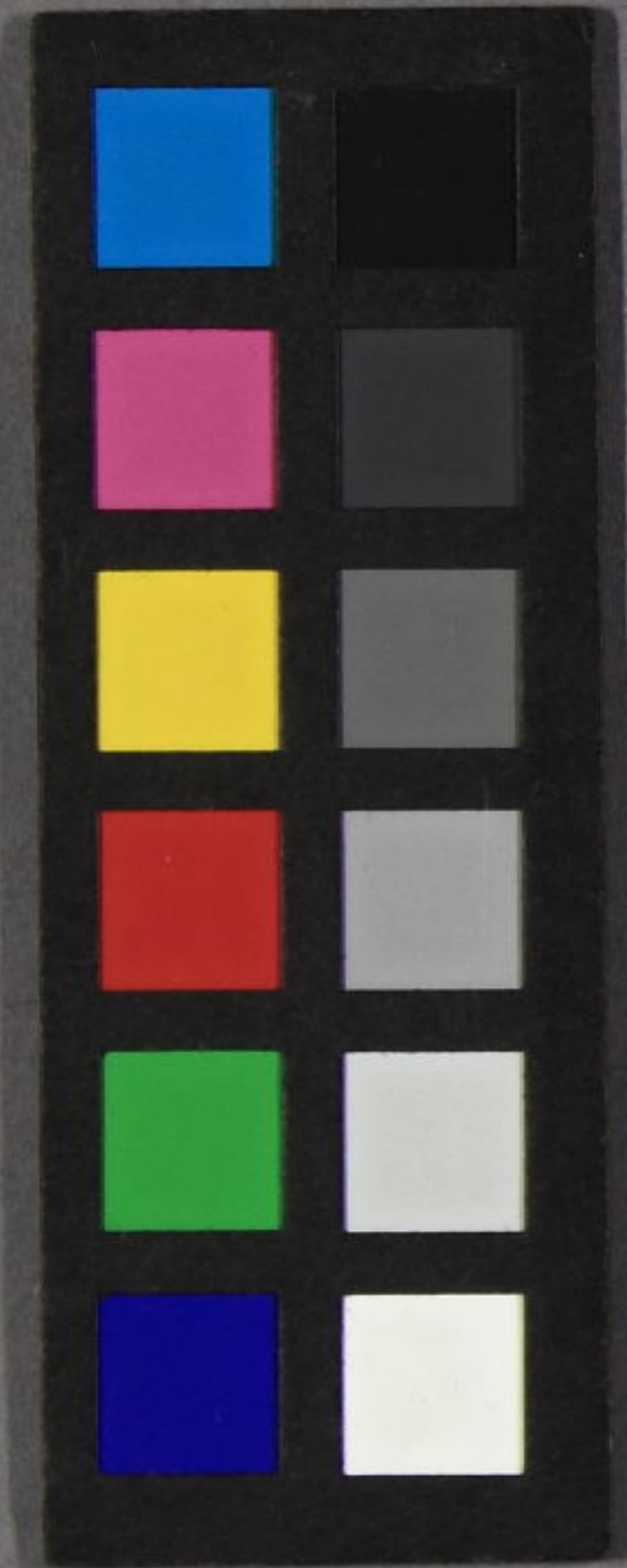


第十篇

定價一匁

九十三番ヴェンリード著

K.S. ASOM.



7887
10

徳川家書

第十卷 文獻一巻

ま

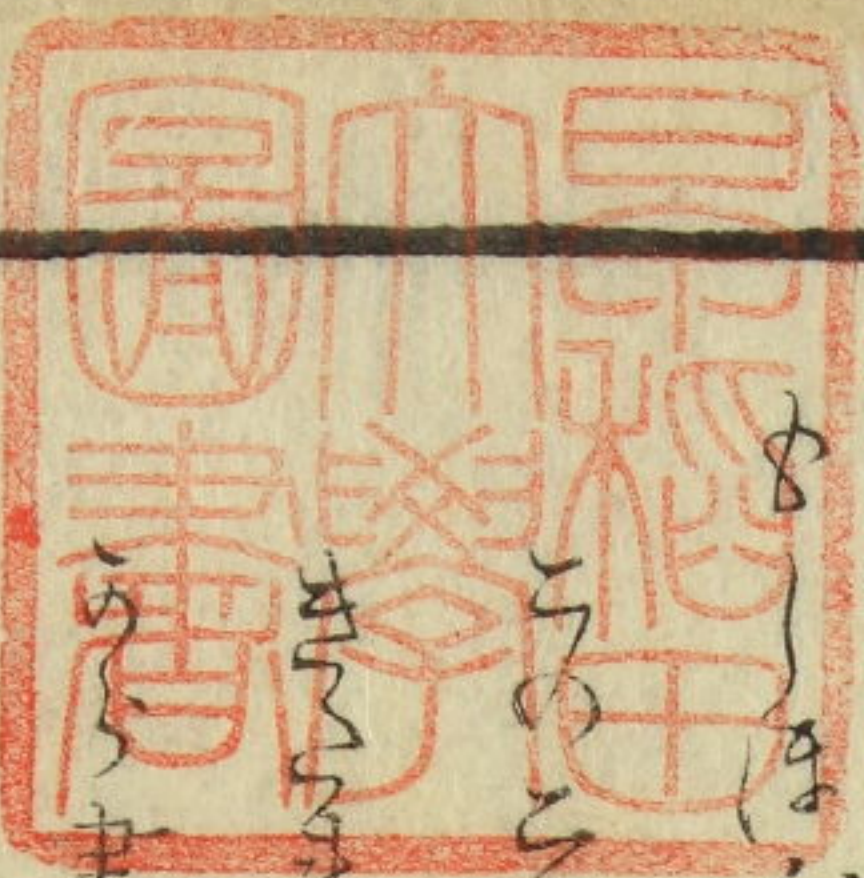
六十三番デムリ一巻

K.2.A.20M

おしほぎさ等十篇

慶應四年戊辰五月十日

西垣文庫



このころ江戸の友人より兩總合戦の實記を抄り
きたりてこれの其のときに出きたる人の
書一たりといひ初篇に載たる舟橋合戦
このおほいぬたぐりゆれの間四月六日に江戸より
送來する書状よりてこの記めせたるなり其書状の
おろく世間流布したるものといえて其後二三人の
同文の寫を送來するされどあの説の江戸脱走方の
兵おほいぬ勝るやうにゆり其後日蓮宗はほろす
行徳よりきりりころのゆり初篇をえ

四十一

てお進いふをむるのめいさくあるとてつらつりその實説
せきこの海ありとたづひふりそぐりなれどこそそが
ののがりぬつまびどのなふねどたつらりなればそれ
せらうちまぶくあにさる

四月のはじめよりおひく江戸を脱走する人おひく
武器兵糧など用意して両總の間舟橋邊にお集せり
同月晦日ころ八幡をおひめたる官軍の陣へまかりて應
接せしむるころ官兵おひくひて兵端をひくひんと
するの意あり官軍より源内府をすてに水府退塾
しそ天兵お抗せぬ謝罪恭順いふく深とまき志を

あつてその臣下たる汝輩君臣の道をまざるべし
り此義分明の上へ速く兵器を天朝へわたり
たてまつるべきめむひひひせしむるもわしと
まりぬ但しきつらめとあき返答よもおひひごり二三日
の間猶豫たつらるべしとて引られけるが国四月二日め
午の刻すらるるめ何の沙汰もたつらりなれ約定
のころり武器相渡さるべしとて違約おひひく兵
威をりつてうけとるべきの間そのむね覚悟あるべきあり
と官軍よりいひつらりあるにそれよりつねは争端
をひくきその夜の子刻むらりお浪士二百人けりハ

幡一押しふせ砲發したりるに官軍ハ不意とうれ
 て兵隊をそのるにいとまあらばあちこちみまされて
 きりむきびしが浪士三十人に備前の藩士西岡
 貞三郎原田作左衛門本莊周平を中にとりこえのけ
 ぶらんとりまひるにさすのが強なる三人も多勢に
 無勢なればまふあましと見えたりけるがやうく一方
 をきりぬきあて陣所へかつりるを官兵ハ備前
 下守の兵のそめくまめたるのひかきそ二時をりあるは
 三日五ツ時と後官軍市河一陣を轉トたりるに四時過
 とあはれしと後浪士方三大隊をりいづし市川一押し

よせたりれば官軍にもまちまうけすることなすは
 やづて人数をりいづたり扱官軍を昨夜使者
 をりて事の仔細を江戸大總督府へ注進たりるに
 いそに援兵をけりいづべき旨御下知ありて市河口より
 藤堂黒田大村の兵雲霞のごとく押しあまる海路か
 薩長の兵川舟めりりのを艦をおしたそくのいそせなる
 ほごにその日の九ツさかり舟橋驛のうへなる獵師
 町小着岸しうさく海陸の官軍一度ふらととれを
 ながりたりる浪士方ハ前後ハ大軍を引受てらん
 ともするなりいづらば隊伍をめぐりてありきあそり

浪士のしるしけるがすたまもたなくとちくする官軍もれ
 べらうももめはるるおちいからうとく切ぬけさる
 手^て疵^{きず}おそぬいささるるハツすたとおぢい浪士
 方一人二人はあちこちよりあつまり驛外あて勢揃
 ーなるが兵を失ふる七十餘人とぞきとえー叔あさ
 の人家に火をこのもてそのひまにあげのびるが東城
 ささくおちいれさるるほど官軍あて舟橋驛の
 人家を一一探索^{さくさ}しるが浪士方ひとりも残ぬるもの
 なりりれどもなほあつ息をとりやあるとてささく
 浪士方の止宿せー家々に火をこのもてさせ早又驛外

の祠^{ほくら}に木砲をうちとませあるが一人づふ土のびぬ
 たるものちりーその夜の新宿^{しんじゆ}まで走りぞれて陣取
 ける

四日浪士の東金まゝに加納山へおちいれさるる
 にさむろーぬる脱走人と一をふたりなるとぞ叔も
 官軍あていきの討死志する者の死骸^{しかい}をとるうづけ
 舟橋驛外なる自^じ立^た院^{いん}といふ寺に埋葬^{まいざう}しそれより中
 山寺へ入り分捕^{ぶんと}の品を點檢^{てんけん}する薩州の多一洋鎗^{やうしやう}二
 百挺備前^{べいぜん}火鎗^{かしやう}三百三十七挺木砲二丁佐土原黒田大村
 などをあつて分捕おほくしるしとぞけふ八幡^{やまはた}陣

を轉せりさても何の意あり〜いきのみあちこちあり
とゞれ〜たとのひ〜中に江戸小石川のたのあ〜と
ゆるとの臆上の丸癩をうけ〜歩行も自由なるべ
野中の打卧ぬるを朋友二人あ〜こまをたす舟
橋あつたところま〜あげたり〜に官兵すぞあつづき
あればやむるをゆげそのをゆひを麥畑の中よりし
あき〜東の方へあちゆき〜がけ〜も官兵の歩卒
こまをさ〜の〜て人〜何のまりて銃砲をうち
このりな〜〜を〜いふ〜つけ〜首をねぢきりて
す〜小けること

五日官軍いけふも八幡の留陣何り〜が軍議あち〜
は〜の〜下決せざるの處に上總の國の處に小脱走乃士
屯集〜たるのよ〜風聞ありされ〜渠が羽翼の
不成らち小此勢小乗〜早く朝敵をたひ上げ上
震襟とゆふんどたてまつり下の萬民の困苦を除くべき
あり〜各部各隊の將卒の進むその用意を
あり〜ありける
六日官軍の雲霞のごとく家々の紋付たる旗をち〜て
て隊伍を〜整と堂〜と〜るの〜るが黄昏
むりに毛見川へぞ着〜る

七日昨夜細作をいまして敵の動靜をさぐるに
一群の浪士隊八幡小屯したるより報じられしに
さぐる舟橋より押すまゝに残兵どもなるべし
やむが彼が不意を抄るる塵あつてはねがず
薩長たうびの藤堂の兵あつてを抄ると待掛て
下度ふと物しよせられ浪士方一たまりもあまら
さんぐのちりて濱邊を南へ押しめたる備前佐土原
筑州の兵もひききつておしきつりあるほと浪士
五井ふもたまり得ば姉崎までおちめびりこの間
五里むらりの処浪士のちりきりむすび火花

をちびしてたこのふくと凡三時をりるとさても浪士
方の姉崎へ去りては脱走の兵士屯しおちる
と下手ふちりて敵を合せんと用意したりるをりは
官軍にちりおちりて四方より時のと急をあけて大砲
をうちおちければ浪士方の蜘蛛の子をちりぬがとく
ちりぬおちりてあちちちりて勇戦し
二百餘人討死たりたりとさてもいさひ七ツさつり
あづまりければ諸家の軍兵姉崎へあつちりて下宿し
たりる

八日きの敗走の浪士方の木東津へおちあつちりる

四十一
一

又真利谷の真如寺の江戸脱走の士八百人計
屯集しをきつての義軍隊と称するのありむれ細作
かつりきつて報トあり色バ薩長の木更津にむらむ
備前藤堂の真如寺みぞむらむ

木更津真如寺兩處の戦争勝敗及び委細の事件の
第十一篇ふらむべ

西垣文庫 特
文庫 10
7387
10